俳諧草鉞八幡鐘　巻五部

五味松塘選

蒙御免

横綱　五十八、浅草　淡水

東の方

大関　四十五、近江　牧人
関脇　三十七、箱根　凍蕊
小結　三十六、浅草　知源
前頭　三十三、小石川　環州
前頭　三十一、北海道　美波
前頭　二十六、神田　道生
前頭　二十三、下谷　落葉子
前頭　二十一、下野　三樂

西の方

大関　三十九、常陸　紅雨
関脇　三十七、金杉　勾沙弥
小結　三十五、下谷　風籟
前頭　三十三、京都　宮々
前頭　三十、下総　渓瞻
前頭　二十三、三重　孤峰
前頭　二十二、福島　水瞻家
前頭　二十、上総　一秀

行司　五味松塘　木全花抱
弘田知秋

深川公園
俳句部

萬友會

同　十八、東京　越中　流花
同　十七、京都　紅葉
同　十七、広島　五瓜
同　十五、京都　新
同　十四、信濃　北
同　十二、信州　米石
同　十一、三河　月洋
前頭　十、岡山　栽
同　十、東京　石庵
同　十、京都　菓坊
同　十、広島　翠
同　十、信州　天雅
同　十、信州　涯

同　十、神田　梅
同　十、大阪　紅
同　十、目黒　鴎
同　十、神戸　卯月
同　十、京都　柳村
同　十、神田　水蘋
同　十、千葉　牧
前頭　九、小田川　弱賞
同　九、京都　火石
同　九、茨城　羊水
同　九、東京　迷魔
同　八、下谷　牛
同　八、東京　柳
同　八、神戸　人月
同　八、京都　十樂
同　八、伊勢　月
同　八、佐賀　梨
同　八、アカツカ　美知
同　八、佐賀　草
同　七、ミノ　桂
同　七、ミノ　花
同　七、ミノ　風
同　七、ミノ　月
同　七、ミノ　雪
同　七、ミノ　齊

前頭　十一、神戸　晶
同　十、東京　二和
同　十、信州　之
同　十、信州　古
同　十、信州　六
同　十、信州　西
同　十、信州　麻
同　十、信州　時
同　十、大サカ　麦
同　十、ロキジ　空
同　十、大サカ　仙
同　十、東京　楊
同　十、東京　芳
同　十、東京　橋
同　十、東京　里
同　十、東京　雲
同　十、東京　笑
同　十、東京　宣
同　十、東京　交
同　十、東京　男
同　十、東京　橋
同　十、東京　人
同　十、東京　花
同　十、東京　寸
同　十、東京　史
同　十、東京　南
同　十、東京　宇
同　十、東京　静
同　十、東京　橋
同　十、東京　丹
同　十、東京　青
同　十、東京　麦

「採点數」天二十五、地二十、人十五、五六十、再考五、秀逸三、外出句一句一の割

源川 幾久 三色樓主人選

秀逸

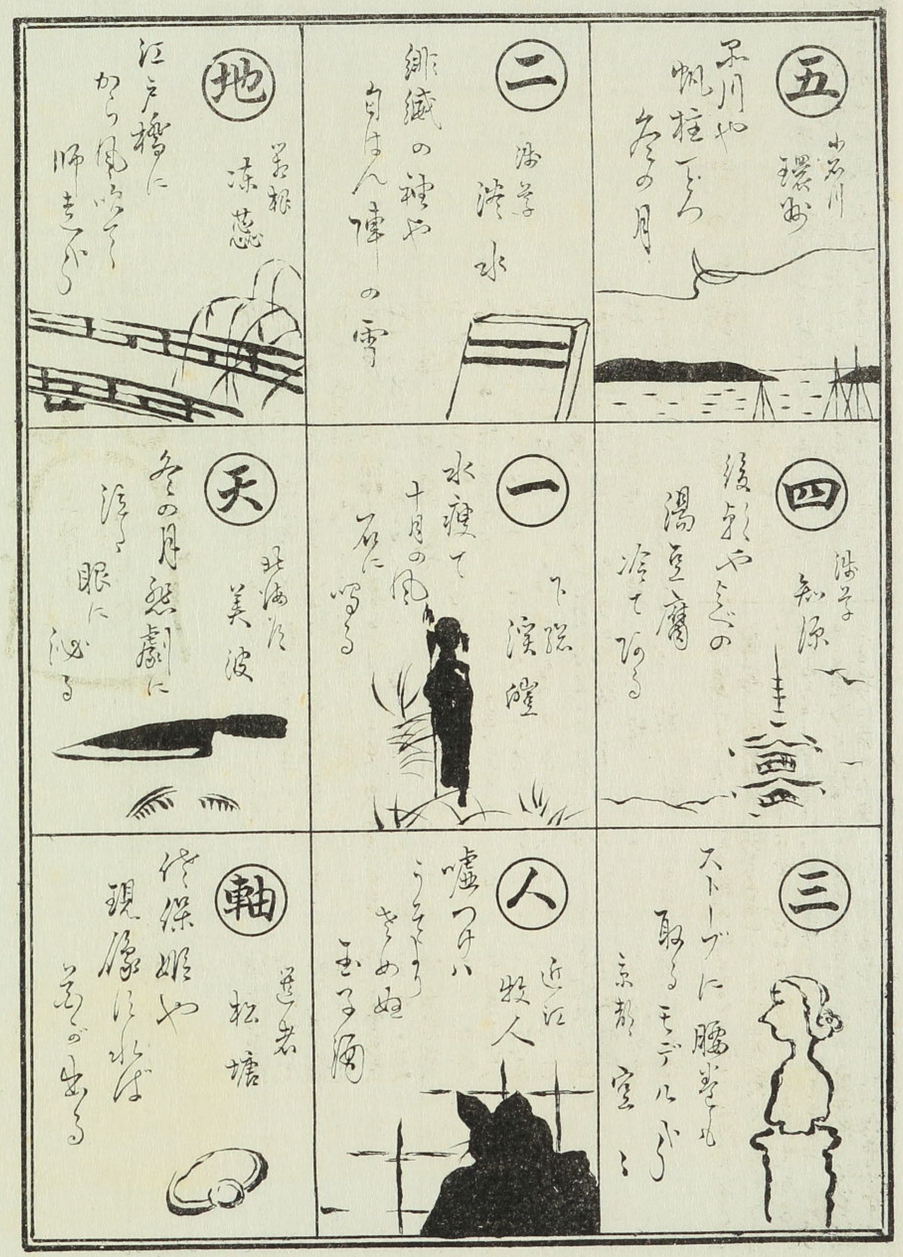
散る中柳 法話も深て人の散
里に 柳る梅 中男子道三里
冬枯 好美 まのこの歌 いの仙色
月清 の撰に 冬の月 の月
仲 の仙 中 冬月 清き 清の風
水くも 中 接 月 清き 清の
河 水 中 カチこや 安常 まの紀河
過 の 河 涼 て 過
時 の 中 柳 計 き十 一時
餅 柳 中 柳 に 餅 の 餅
月 常 餅 遠 に 月 常 の 月
乙 餅 美 中 常 の 乙
帶 美 ふ 中 常 の 帶
五 関 中 の 柳 清 の 五
〃 の 仙 中 月 乙 の 〃
〃 山 皆 の 京 寒 ひ に 〃
〃 庫 藏 遊 け 後 寒 〃
人 美 の 仙 中 微 寒 に 人
地 美 主 皆 中 身 動 ま 地
天 美 柳 美 の 柳 妓 て 美 天

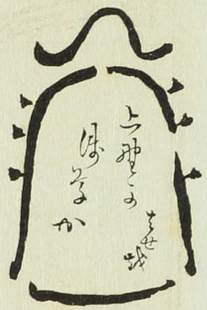
掛

雪 間 を 思 た 河 の 空

風 散 月 美 波 月 美 海 洋 月 美 涼 月 美 知 人 月 美 一 宣 と 交 月 美 義 月 美 原 一 月 美 寒 月 美 涼 月 美 人 月 美 一 秀 と 交 月 美 月 美 原 月 美 月 美 月 美

喜多村緑樹選





……今年大……

福島　渡四郎　京ト　山崎宗一　ミハ　鈴木不雅　ボノ　日本橋　俗を今義を　大阪　上田三文　松原風雅　ふる川　大江曙山　社下　まつ木素文　下サ　久保田松近　ヒタチ　山下如雨　下野　西渡四郎　下ヤ　鈴木雅甲　俗が　多久良茅舎　北海道　皆川美波

休刊のお詫と不平

漣猫子

前号の巻頭の挨拶で一寸ほのめかしておいたように、本誌は今年の二月から、家業なりつとめの方の都合で、どうしても暇がとれなくなりまして、やむを得ず休刊することになりました。

ほんとうは、もっと暇があれば、いくらでも面白いものを作りたいのです。俳句の方でも、俳諧の方でも、ほんとうに、いくらでも、いくらでも、作りたいのです。

家業なりつとめの方の都合で、どうしても暇がとれなくなりまして、やむを得ず休刊することになりました。

ほんとうは、もっと暇があれば、いくらでも面白いものを作りたいのです。俳句の方でも、俳諧の方でも、ほんとうに、いくらでも、いくらでも、作りたいのです。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

◎競点欄に就て

本誌より発表したる競点欄を既記の如く本月を第[illegible]号より第十期迄の六ヶ月間を一期間として、此期間に於ける累計最高点者を横綱とし、賞品を出選者の期間中の最も優秀なる一句を金壱拾錢として記載する欄新入本誌を呈し以下夫れ夫れ賞品を呈す。

従今回報告する採点法一出句数を一点宛に計算する点を免角の批難あるに付き次回より此法を廃し総て入選句のみの点数を採用する事に改めたり。

◎互選欄設置の主意

南の国北の国山の人海の人、雲煙千里を隔て海山千里を離れたれども、眺むる月を一つとする情操する趣味を同じくする、其人々の作品に依て八まん雑を誌上を埋めて居るのである。保しこれをとりつぐても俳句会に於ては一堂に会して俳句の会を開いてありたいと思ふ熱望は到底満たされなかつたのである。此法に依たすれば時日をこそは要するとの北海道の人九州の人煙波数里を隔てた人達も一堂に会して句を競ふのと大差なく、至極興味のある方法であるとの期待を抱て出発を謹んでせられたい。

俳諧草紙　八幡鐘　第六声募集

入花（読代送料共）

◎春季混題　五句一組金弐拾錢　餘八一句毎に壱等増　三名五客（呈賞）

五味松塘選

◎出句者共樂　互選欄

課題（春の水）（蛙）　隨意　入花一句金五錢　但本集出句者に限る

出句者全部互選　最高点者壱等より第八等迄呈賞す

■〆切貳月弐拾五日厳確■

○用紙は総て半紙前面へ作品後面（住所氏名雅号明記の事）○本珠と餘珠及互選は各別紙に記されたし○入花は為替に限る（改正為替料（四以下二銭とのたり）郵便局遠隔の地又は最小額の為切手代用を法すれども此場合は二割以下の切手堅く一割増の事。

▲従来懸賞として金を呈し居りしの餘りに全風雅なるの誤りなりとの為に呈する事と代るに句数に於て入花を軽減したり此段了承あり度

大正四年二月　日發行

東京市麻川区公園第十二号　編輯兼發行人　五味時雄
金神田区久右衛門町二番地　印刷人　中田治郎
東京麻川区公園地第十三号　發行所　萬友會俳句部

俳諧草紙八幡鐘　第六聲募集

春季混題

入花（誌代送料共）壹株（五句）金貳拾錢
餘は一句毎に金壹錢増

五味松塘選　三先五客呈美賞

■三先五客入撰句は俳画の大家水谷春川・椿画伯の意匠画を配し特別欄に掲載す。

■餘興とせる採点競技欄（毎号発表）は本誌第一号迄の得点を通し相撲番付に擬し最高点者を横綱とし当撰者の俳句を現はしたる桐箱入金等絵本盃壹個を贈り外に東西三役（六名）へ特別賞を呈す。

◎互撰俳句欄

題　春の水　蛙

（出句は本誌読者に限る）
句数　入花一句に付金五錢
随意

出句者総互選　最高点第一等より第八等マデ呈賞

△一切貳月二十五日厳重〆

◎投吟規定◎用紙は総て半紙、前面作品のみ後面へ宿所氏名雅号を記す事■本誌、余白及び互撰吟は本別紙に認む事■入花は為替に限る（改造為替料一円以下二錢）但郵便局遠隔其他事情不得止場合は切手代用も諾すれども此場合は二錢以下にて必一割増の事。

◎当撰所五月十日発刊（既刊）

◎当撰所六月三日発刊（既刊）

投吟所　東京市麻布区霞町　霞会俳句部

定價一部金拾五錢